Li-tweet 二月号

目次

巻頭詩

繭たちのさざめき　崎本 智（6）　3

特集　二・一四恋愛事変

ストレインヂデイズ　うさぎ　6

行くな！　ガーゴン　常磐誠　22

雷の内部　る　32

其のX。真央。初恋地獄篇　小野寺那仁　35

横を向いたまま　日居月諸　46

自由創作

浜辺の童　しろくま　58

魚人岬　芦尾カヅヤ　61

帰省　とーい　63

ランナーたち　安部孝作　69

黒牛の絵画　安部孝作　76

今月のレビュー

立ち食いそばのラーメン　とーい　80

必読！　ネット文藝　芦尾カヅヤ　81

ガン・ガン・ガン　安部孝作　82

『タイマ』嶽本野ばら　小野寺那仁　85

朝靄の食感　崎本 智（6）　87

編集後記　88

記録　89

巻頭詩

繭たちのさざめき

崎本 智（6）

失われた翡翠色の時間が　クラースナヤ・プローシシャチ　に点在
する
帽子をかぶった少女たちが水たまりのようにできた穴を避けながら
「秘密　秘密」ということばを繰り返す　熱がさまされて　ひたす
らに熱がさまされて
ポシェットからいまではもう存在しない街の名前が　広場におと
されても
クラースナヤ・プローシシャチの婦人たちは　だれも振りかえるこ
ともなく
毛皮をきて　襟巻をつけて歩いている
高等学校がいっしょだったのかもしれない　ねつ造された記憶か
もしれないが
僕は航空課に進学して　彼女はもう存在していない街にとらわれ
つづけていて
少数民族のことばを専門課程に選択して　故郷のことを考えつづ
けていた
しょうが入りの紅茶に蜂蜜をたらして暖炉をみつめるのが好きだ
ったあなた
街はずれの鉄橋の下では蝙蝠たちの死骸が積み上げられている
「灰いろの雲へお供え」鍵盤をたたきながら音楽学校に通う生徒た
ちはそういった
調子外れのレの音が曇り空の広場におきざりにされていた

うまれるまえの記憶　名前をつけるならそんな場所
たったゆいいつあなたと共有できた冬の花火　花火師たちは河畔
林のなかに隠れてしまった　空の祭典　ゆれる水面がまぼろしを
つれてきて　祭りの音楽がきえたとき静寂と共に星座たちがあと
に残された　あなたは星座をみつけるのが得意だった

冬の花火をかつて水面に映した湖で別れをつげるための最後の時
間
太陽と星のすれ違う宵闇の一瞬に枯れ枝と落ち葉のなかで火の粉
が燻りつづけている
火はうまれてもことばたちが矢継ぎ早にうまれることはなくて火
は沈黙とあいしょうがよかった　繭のように僕たちはふわふわの
毛布にくるまって　午睡にあらわれた翡翠色の時間のなかへおち
ていく　砂時計の砂はもう元にはもどせない
白い枝が雪の上に音もなくふってきた　雪の重さに耐えられなく
なったのかもしれない　ぐるぐるとまわりの景色がうずをまくよ
うに廻りはじめていて　認識の糸が彼女の記憶によってほぐされ
てしまいそうだった　名前をおもいだすこともできない　顔をお
もいだすこともできない　彼女という代名詞だけがあの広場にお
きざりにされたレの音みたいに　火のなかで爆ぜている

連想することばから飛び火して唇をなぞりながら感触をおもい起
こしていた
メモリのなかは曖昧なことばでいっぱいで写真を保存することが
できない
月が地球から見て蝕を孕むとき　地球に残した彼女のことをおも
う
忘却旋律をきいたときすべてを無にすることができた　だから僕
には感触すら残っていないのできっと唇の感触は記憶違いの産物
に過ぎない

バッハ／ゴルトベルク変奏曲がだれもきこえないくらいのちいさ
な音で
「静かの海」の第18地区にある無人駅でながれている　ゆらゆらと
幽霊のように漂う調べ　残り火が弔いの日を予感させた　調べは
きゅうに色調をかえてだれもいない空間を彷徨っている　演奏は
20世紀のオーケストラによるものだ　埃が光を浴びて目の前をと
んでいく　それを目の錯覚といいきることはできないだろう　僕
は帰球許可が下りたのにまだこのような場所にいる　胸がくるし
くなるほどあなたに逢いたい　凡庸なことばが涙をひきつれてや
ってくる　感触としての記憶　無人駅には僕以外にだれもいない
真空の沈黙が永遠によこたわっていた

38の実験プログラムはすべて終了　同期生たちは祖国に帰っていった
クラースナヤ・プローシャチで帽子をかぶった少女たちが　輪になっておどりながら「秘密　秘密」といっていたのが　かろうじて渇かないで僕の瞼に残っている
あの曇り空の日　僕は微かに何かをとらえていた　誰の眼にも一瞬にしかうつらない　時間の裂け目を　人工知能でも解析することができない幕間を
「静かの海」の暗闇で　目を瞑ることは何を意味する？　僕は誰に問いかける
問いをたてることが　月面に国旗を競ってたてたこととどう違うのだろう　そこにどれだけの血がながれたのだろう……
しょうが入りの紅茶に蜂蜜をたらして暖炉をみつめるのが好きだった彼女
あの部屋に洗濯物はずいぶんと溜まっているだろう　太陽はそれを見過ごしているのかもしれない　星たちは気がついているのに

繭玉の雨が風に色をあずけながら
春の嵐に溶けていく
手からこぼれるように
冬は失われた翡翠色の時間を抱いて去っていく……

自由創作

浜辺の童

しろくま

ファインダーを覗く、波打ち際で遊ぶ子供たちを捉える、ホワイトバランスは晴天で、露出を下げて色を引き出す、空と海、六対四で空を大目に、ピントは無限遠。ゆっくりとシャッターボタンを沈めた。潮風を小さく弾くシャッター音が、余韻を残して風の中に消えた。

低い雲の群れが西日を纏って横滑りしている。目の前の風景が四角く切り取られて、子供たちを捉えて液晶に表示された。遊ぶ子供たちの姿が、影法師になって写っている。これまでも、毎日同じように遊んできたのだろう。

砂浜はもう冷えていた。つま先で冷たい土の中を探ると、白く小さい、綺麗な貝とサンゴ礁の化石が出てきた。手に取ると、浜辺の冷たさをそのまま感じた。

今まで、自分がここに来る以前も流れていた時間の流れが、速さが、島の外とは違っているようだ。街から予約したワゴン車で山道を走り、五時間進んだ所にある船着場から、四人乗りの小型ボートで四十分、真っ直ぐ沖へ出た所にある島だった。数百メートルもの水深を持ちながら、島に着くまでの海面は、まるで銀板のようにその上を歩けそうだった。

無数の星を仰ぐ、一面に広がる海も何一つ音を立てない、走るボートのエンジン音だけが響くような、ある種幻想的な世界の中で、星空の下の影から島が現れた。その島に近づくと、ボートは水上に並ぶロッジの間の桟橋に着けられた。ボートの運転手と、同伴したエージェントと、迎えに現れた何人かの島の男達に、カメラや財布、何もかも入った鞄をそのまま任せ、体一つでロッジの一つに転がり込んだ。今学期、休みなく働いていたことと、旅の疲れを、気付けば翌日の太陽が昇って島の全貌を露わにしてからも、薄汚れた、使い古されたベッドの上で癒していた。昼をとうに過ぎ、夕方近くになってから、ようやく身を起こして、カメラを持って外に出た。

人口は百人といったところ。小学校低学年か、それより下の歳の子供たちが多い。島の住民以外は、数少ない観光客以外に学者も時折訪れて、何日かロッジに泊まっていくらしい。彼らはウミガメの調査が目的で、産卵に来たウミガメにタグを付け、卵を保護し、卵が孵り海へ行くのを見守る。

赤道に近い所にある孤島の、素晴らしいマジックアワーは淡白に

過ぎ去っていき、波に小さく揺れるボートの脇、影になった水面の下で、群れになって舞う小魚が見える。散って、また集まって、一つの生き物のように動く。その周りを、体長一メートル程の、天狗のように鼻の骨の伸びた魚が、「我関せず」といった体でゆっくりと周回している。一人、他の魚たちと異なる彼が、腹を空かした時に小魚たちを襲うのかどうか、そのために今、小魚たちの警戒を薄めるために、少しずつ小魚に近づこうとしているのか、私には分からない。一人だけ不揃いな鼻の長い魚は、ただ不気味に、その長い体を横にして漂っていた。

島の中には五軒のレストランがあった。観光客向けのヨーロッパ風の外装をした店には、体の大きな白人の老人たちが何組か、テーブルを囲んでビールを飲んでいる。向かいにある、現地の人たちが利用するこじんまりとした食堂で、黄のポロシャツを着た男がテーブルで一人、右手を使ってご飯と魚を食べていた。こちらを見ると、テーブルの上にメニューを放り投げて寄越し、私は薄汚れた写真の中の一つの、魚とえびの炒め物を注文した。

男は食事をしながら、沈めた怒りを込めた上目使いで、白目がやたらと強調された目をこちらに向けて覗いてきた。

「どこへ行っていたんだ」

「ちょっと散歩をしてきただけだ」

「勝手に消えてはいけない」

「海を見てきたんだ」

「もしお前が消えてしまうと、俺の問題になるからな」

腰の大きい、花柄の黄色いワンピースを着た、黒い肌の女が皿を持ってきた。表面の曇ったスプーンと取り皿をティッシュで拭い、出てきた料理をご飯の上に移して食べた。食事中、料理を持ってきた女は、近くの椅子を引いて腰掛け、日に焼けた顔をこちらに向けて、最初は英語で、こちらが現地語を操れることが分かれば現地語で話し掛けてきた。どこから来たんだ、何をしているんだ、彼女はいるのかといったことを訊いてきた。曖昧な返事を返しながら料理を食べていると、黙々と食べていたエージェントが会話に入ってきた。

「奥さん、息子は何人いるんだ？　日本語は勉強しないかい？」

「息子はいないが娘が三人いるよ、日本語だって？　その人が教えてくれるのかい？」

「あぁそうだ、ここでは日本語を学べないだろ？　日本語を教えたかったら俺に言いなよ。日本に連れて行ってやるから」

「それはいいねえ、私も連れて行ってくれるかい？」

女は笑ってエージェントの話に乗っていた。

「俺が連れて行けるのは生徒だけだが、この男に連れて行ってもらえばいい」

「本当かい？」

そうやって四つの瞳が向けられてきた。笑っているが、エージェントの目はいやらしくも見える。目が合ってしまったが、無理に聞こえていない振りをした。

エージェントはこちらに体を向き直した。

「お前の社長に留学できる生徒を五人送ると言った。行けそうな生徒を集めて紹介しろ」
「まだまだ、彼らはこれからの生徒たちだ」
「三ヵ月後に五人送りたい。コミッションは一人五パーセント、社長に伝えてくれ」
「あんたが送りたくても、時間が掛かるんだ」
女に値段を聞き、ポケットから取り出した紙幣と、無理を言うエージェントを置いて一人で店の外に出た。店の前では砂浜から戻ってきた子供たちが遊んでいた。子供たちはゴムボールを追い掛けて、砂の道を右へ左へと走り回っていた。
手にしたカメラのファインダーを覗いて、遊ぶ子供たちを撮ろうとしていると、それに気付いた子供たちが、興味を持って恥ずかしがりながら、少しずつこちらに近づいてきた。僕を撮れ、私を撮れと、カメラの前で入れ代わり立ち代わり、はしゃいだり踊ったりして見せた。赤ん坊を抱えていた母親が、子供たちが集まっているのを見て、笑顔で近寄ってきて自分の子供を見せて来た。親馬鹿に嫌みはない。この島は子供ばかりだ。極端な少子化に陥っている日本が問題なのか。ここにもいつか、少子化の波が来るのだろうか。
無垢な彼らに、見たことないものを見せてあげたい、彼らを日本に連れて行きたいという思いが頭を過ぎる。彼らを連れて行く方法が頭の中で巡る。しかし、今も無邪気に跳ねている彼らを前にして、頭皮一枚、頭蓋骨を隔てた頭の中で、道筋を企てて、そのために必要な経費のことを、エージェントと同じようにして考えている自分が嫌になった。
夜が更けても、まだ元気に遊ぶ子供たちを後に、一度ロッジに戻ってからすぐまた外へ出た。夕方に浜辺の写真を撮った時と同じ場所で、三脚の脚を伸ばして立てた。
日本では過ぎ去った波が、今別世界の孤島に押し寄せてきている。気付けばおかしな世界に足を踏み入れたものだ。夜の浜辺は月明かりでかなり遠くまで見える。潮が引いていて、黒い砂浜がずっと先まで続いている。
長時間露光を試みた。液晶に表示された画像には、黒い砂浜の上に丸い影が幾つか写り込んでいた。一、二、三、四……、拡大していくと影が無数に写っているのが確認できた。それは遠い海からこの砂浜へ卵を産みにやってきた、ウミガメたちの姿だった。

（了）

魚人岬

芦尾カヅヤ

自分が母の腹から生まれたのか卵から生まれたのか、人魚は知りませんでした。物心ついたとき、自分と同じ形をしたものはまわりにはなく、ときどき月明かりの下で水面に映る自分を見て、なんと不思議な形だろうと首をかしげるのが常でありました。海には沢山の魚が泳いでいましたし、空には沢山の鳥が羽ばたいていました。しかし、人魚に似た生き物はどこにもいませんでした。

「ねえ、あなたたちに似た生き物はたくさんいるけれど、わたしに似た生き物はいないのかしら」

人魚は、南から渡ってきた鳥の群れに尋ねました。

「お前に似た生き物なら見たことがあるよ」

人魚はびっくりして、どこで見たのか尋ねました。

「あれは陸の上にいる。陸の上ならどこにでもいる。お前のような顔をして、お前のような手があった。しかし、あれはおそろしい生き物だ。海のものも空のものも、陸のものも食べてしまう」

「あなたたちだって、わたしの友達を食べたじゃないの」

「あれはお互い様じゃないか。やつらは違う」

鳥は、おそろしいおそろしいと言いながら北の方へと行ってしまいました。

人魚はそのおそろしい生き物を見てみたいと思いました。人魚は若く、好奇心旺盛な年頃でありました。鳥はああ言ったけれど、同じ形をした生き物に、自分が殺されることはないと思ったのです。海の中で、同じ生き物を食べたり殺したりするのを、人魚は見たことがありませんでした。

人魚は、陸を目指してまっすぐ東に進んで行きました。

遠くに陸が見えました。しかしそこは切り立った岩壁になっていて、とても上がれそうにはありません。人魚は陸に近づくと、浜を探してあたりを泳ぎ回りました。そのとき、崖の上に生き物が現れました。

人魚は息を呑みました。自分と同じような顔、同じような腕。人魚と同じ年頃の娘が、そこに立っていました。

自分と同じ姿をした生き物を目にして、人魚の胸はうれしさで高鳴りました。物心ついてから初めて自分と同じ形のものに出会えたのです。唯一、尾の部分だけが違っていましたが、それでも今まで見たどの生き物よりも自分によく似ていました。

娘の後ろから数人の男たちが現れました。娘は怯えた表情で海を見下ろしています。

物々しい雰囲気に嫌なものを感じて、人魚は水の中に隠れました。それと同時に、大きな音を立てて水面が揺れました。びっくりして音の方を見ると、口と鼻からあぶくを吐きながら沈んでいく娘と目が合いました。まっ逆さまに沈んでいく娘の両足は、麻紐できつく縛られていました。

人魚は娘を追って潜っていきました。娘は、人魚とは違い水の中では生きられません。苦しみもがく姿を見て、人魚は初めてそのことを知りました。

人魚は急いで追いかけますが、どんどん引き離されていきます。まるで海の底が娘を吸い寄せているかのようでした。

娘のあとに、崖の上から酒が撒かれました。穢れを払う、清めの酒です。

娘は穢れておりました。キズモノでありました。

村の娘たちは、婚礼まで生娘のままでいなければなりません。穢れた娘は崖から海へと投げ捨てられました。

娘は純潔でありました。祭りの夜、酒に酔った男衆に手篭めにされて血を流すまで、身も心も純潔そのものでありました。

穢れた娘は、もう誰にも股を開かぬようにと両の足をきつく縛られて、海の底へと沈んでゆきました。

そうやって、これまでに何人も何人も沈められてゆきました。

動かなくなった娘は勢いを増して海の底に沈んでいきます。

人魚は胸が苦しくなるのを感じました。今までこんなに深く潜ったことはありませんでした。光が届かなくなり、娘の姿が霞んでいきます。それでも人魚は追い続けました。追わずにはいられませんでした。

海の底には、人魚の生まれる場所がありました。足を縛られた娘たちは海の底で両の足を尾に変え、永遠に股を閉じた姿で目覚めるのでした。

人魚は、光り輝く珊瑚礁を見ました。そこにはたくさんの娘が横たわっていました。娘でないものは骨になっていましたが、娘たちはきれいなまま、皆ぴったりと足を閉じた姿で珊瑚礁に抱かれていました。

自分が母の腹から生まれたのか卵から生まれたのか、人魚は知りませんでした。

今の今まで、知りませんでした。

（了）

帰省

とーい

高速バスを降りると、目の前に果樹園がある。そばに即売所があって、すいか、メロン、桃が並んでいる。
乗り継ぎのバスまで、時間があった。
バス停のベンチに腰かける。空には大きな雲が浮いていた。道路に往来はない。蝉の鳴声が聞こえる。
しばらくして、バスが来た。
客は無い。アナウンスが車内に空しく響く
途中、名前だけ残る工業団地を過ぎ、交通安全と書かれたアーチを抜ける。
降りると、懐かしい匂いがした。

「ただいま」
「よく帰ってきたこと」

一年ぶりに見る母は元気である。
荷物を置き、仏壇へ向かった。盆で、いろいろの供物がある。
手を合わせていると、
「一年は早いね」
台所から母の声が聞こえる。
「お父さんは」
「刺身を買いにね、食べさせるんだって」
「いいのに」
「嬉しいのよ、お父さんも」
言いながら、母はすいかを持ってきた。
「最近、どうなの」
「どうって、まあいろいろかな」
すいかをかじりながら答える。
「やっぱり、田舎のすいかは甘いね」
「いくらでもあるからね」
母はほほえんでいる。皿に散った種に虫が一匹止まり、すぐに飛んでいった。

「よく帰ってきた。乾杯」
父の音頭でグラスを合わせた。ビールは冷たく、父は一気に飲み干す。
「早いんじゃないの」
わたしが言うと、

「ほら、恵美も心配していますよ」
「大丈夫だ。恵美、注いでくれ」
つぐと勢い良く泡が立ち、あふれそうになった。父は慌ててグラスに口を近づける。
「こういうところ、恵美は全然変わらないのね」
「普段はおっとりしているのに、こういうところは相変わらずせっかちだな」
父の言葉にみんなで笑った。
テーブルには御馳走が並び、父の買ってきた刺身もある。食べなさい、はじめこそ勧めてくれたけれど、食べるのは父ばかり。母はたまごやきを、わたしは浅漬けを食べている。
「明日、墓参り終わったら、温泉でも行くか」
ビールを飲みながら、父が言った。
「墓場の片付けは明後日だし、午後、家を空けたって御先祖様も許してくれるだろう」
「そうね、恵美はどう」
母も応じる。ふたりで決めていたのだろう。
「え、うん」
大人しく答え、
「どこに行くの」
「街の向こうに、新しいのが出来たんだよ。掘ったら出たんだ」
「結構、混んでいるのよ」
「そうなんだ」
答え、残りのビールを飲み干す。
「この間、山の帰りに入ってきたが、湯も出てよかった」
そう言って、父もビールを飲み干し、母に新しい瓶を催促する。
はいはい、と母は台所へ向かう。
「やっぱり、恵美がいるといいな」
「そんな変わらないでしょ」
笑っている父の顔には去年よりしわが見えた。
ふたりとも年を取った。わたしだけ好き勝手に生きている。よその親ならいつまで夢を見ているんだ、としかるのに。
最後の一本よ、と母がビールを持ってきた。
わたしが栓を抜き、父のコップに注いだ。今度はこぼれない。終えると父が瓶を持ち、わたしのコップに注いだ。

食事を終え、父は寝転んでいる。わたしと母は後片付けをし、台所でビールをもう一本だけ空けた。
その間に父は寝床に入り、母も鳩時計が十二回鳴いたころに寝た。
わたしも二階の自分の部屋へ行く。
都会と違って、カーテンを閉めなくてもよかった。あかりを消すと、空が見えた。無数の星が散っている。
「田舎にいるときぐらい、ケイタイの電源切ろうかな」
夜空を見ていてふと思い、携帯電話の電源を切った。
ベッドに潜ると母が干してくれた布団は、いつまでも温かかった。

にわとりの鳴声が聞こえる。
寝過ごした。時計は六時半を回っている。
着替えて降りると、母は食事の仕度をしていた。
「おかあさん、ごめん」
謝ると、
「もっと、ゆっくりすればいいのに。とりあえず顔洗ってらっしゃい」
きょうは墓に供える弁当を作らなくてはならない。その他、仏壇の飾りつけなど仕事は多い。
早速、わたしも畑に行き、トマトやとうもろこし、お供えの花などをもいだ。そして、たまねぎの味噌汁などを作る。
とうもろこしを茹でて輪切りにし、弁当に詰めていると、父の拍手を打つ音が聞こえた。母もわたしも仏壇に手を合わせ、線香が燃えつきたところで食事となった。
父は朝から元気で、「今年は早くお参りして、街に行かなくちゃな」
と言い、母も、
「九時ぐらいには、行きましょうか」
と、答える。田舎はさすがに早い。
「そんなに急がなくてもいいのに」
苦笑するわたしを見て、
「早く温泉に入って、スーパーで買い物するからな」
父は言い、山盛りのご飯を筋子で頬張った。

九時過ぎ、お供え物と家紋の入った桶を持ち、村の墓場まで歩いた。日差しの強い日で、母から畑で使う麦わら帽子を借りた。
途中、何組か村の人々に擦れ違い、墓場まで行くと、入り口にあるお地蔵様へは既に多くの供物があった。
「早いね」
つぶやくと、
「みんな早いんだよ」
当然のように父は言った。
自分の家の墓へ行き、台の上に蓮の葉を敷き、弁当を供えた。墓の向こうは一面田んぼで、微かに垂れた稲が黄色味を帯び始めている。
本家の墓にも線香を上げ、お菓子やとうもろこし、枝豆などを供える。入り口のお地蔵様へも同様にお供えし、墓場を離れた。

数年前、廃線になった駅の近くに、温泉はあった。以前、炭鉱と街をつないでいたこの路線も、廃坑とともに乗客が減った。耳をすませば、ディーゼル列車の力強い音と警笛がいまでも聞こえそうな気がする。
「よく、こんなところに出たね」
わたしはたずねた。
「マンション建てるつもりで掘っていたら出たんだ」
「本当、運が良いわね」

両親は言い合い、車のトランクから洗面道具を出している。
温泉は健康ランドのような外見で、風情はなかった。しかし、この辺の人には目新しく、安価で、気を使わないのがいいのだろう。
湯は透明で、最初、温泉かいぶかしかったけれど、芯まで温まった。サウナも無料で、水風呂との間を母と何度も往復した。
出て来ると、父はマッサージチェアーにいて、全く長いな、と笑った。
ごめん、母と謝って、わたしは缶ビールを買い、父に渡した。
わたしが運転するから、と言うと、父は一瞬迷ったけれど、うれしそうに缶ビールの栓に指をかけた。

スーパーは街の中心にあった。大手資本と地元の２つのスーパーがあり、それぞれ頑張っている。
一軒、昔からあった百貨店は廃業していた。スーパーまでの道すがら通り過ぎると、シャッターが下りていた。高校のころ、上の食堂で友達とみつ豆をよく食べた。父が言うには街中にあるから駐車場が小さく、客が減ったらしい。
わたしたちが行くのは地元のスーパー。買い慣れているし、新鮮な魚が手に入る。
着くと、
「用事があるから、ふたりで買い物して」
父は言って別れたので、母と買い物をした。
夕食の材料や職場へのお土産を買い待ち合わせ場所にいると、父が来た。ビニール袋を手にしている。
「何か買ってきたの」
たずねると、
「後のお楽しみ」
と笑って、
「アイスクリーム食べるか」
「うん」
「母さんは何がいい」
「私はバニラ」
「恵美はどうする」
「見てから決める。一緒にいこうよ」
答えて、たこ焼き屋の隣にあるアイスクリーム屋へ向かい、それぞれアイスを買って、休憩コーナーで食べた。
「しかし、もう明日帰るんだろ」
アイスクリームをかじりながら父が言う。
「仕事だから、仕方ないのよね」
問うように母は言い、
「うん。もっと、ゆっくりしたいけれど」
それしか言葉が出なかった。
来年までふたりの顔を見られないのかな、ぼんやり考えていると、何かしなければと思った。
「ちょっと待ってて、すぐに終わるから」
両親を残し、買い物に行った。目当てのものはすぐ見つかり、戻

ってくると、
「今度は早いな」
父が言うので、
「お父さんの子だもの、本当は早い子なんだよ」
笑いながら、返した。

帰り道、窓を開けると涼しい風が入ってきた。髪はかすかになびき、真っ赤に焼けた空の下を、車は軽快に駆けていく。
様子を見計らって、助手席の父に話しかけた。
「お父さん、髪染めてあげようか」
「恵美が染めてくれるのか」
驚いた口調である。
「薬はどうしたんだ」
「さっき買ったよ」
「また風呂に入らなくちゃならないだろう」
面倒くさそうな父に、
「おとうさん、染めてもらったら」
母は言い、
「それじゃ、帰ったら頼むかな」
父が返したので食事前に染めた。
父の頭をまじまじと見たことはなかった。
髪は薄くないが、白髪はふえた。苦労したのだろう。いまも、わたしのことで苦労している。そう思うと情けなかった。せめてもと、丁寧に染めた。何度もわけて、細かく染めた。
染まるのを待っている間、わたしたちに会話はなく、台所から包丁の音だけが聞こえた。
突然、父が話した。
「帰って来られないのか」
驚いた。わたしはあぐらをかいている父の背中を見つめている。久々に見る父の背中は昔と変わらず大きかったが、少し丸まっている。
「どうだ」
父が静寂を破る。
「ごめん。まだ帰るわけにはいかないよ」
父は微動だにしない。
「もう少しだけ、がんばりたい」
「そうか」
「ごめん」
「父さんたちなら、大丈夫だ」
静かに父は続ける。
「恵美はしっかりと考えているだろう。なに、失敗したら、もう一度頑張ればいいんだ」
父の言葉が胸を締め付ける。気付かれないよう、静かに泣いた。
「花火でもするか」
父が言った。
「今日の御礼だ。さっきスーパーで買ったんだ」

わたしは小さくうなずいた。

翌日、両親がバスターミナルまで送ってくれた。帰省のころは客が多く、始発のターミナルから乗ったほうがよかった。

一時間ほど走り、ターミナルに着いた。

すでに列が出来ていて、わたしも切符を買って、並んだ。

ほどなくバスが来た。窓側の席が空いていて、そこに決めた。荷物を棚に置いて座ると、両親が見える。

それでは出発します、運転手のアナウンスが聞こえた。

わたしは両親に手を振った。父は片手を挙げ、母は手を振りながら頬を指でぬぐう。

いつしか、ふたりの姿が滲んだ。

バスはゆっくりと走り出し、しばらくして高速道路に乗った。三時間ほどで終点に着いた。

新幹線に乗り込むと家族連れが多く、車内は賑やかである。

列車は定刻に出発し、速度を上げる。わたしは携帯電話の電源を入れた。

（了）

ランナーたち

安部孝作

口笛を吹きながら、人工衛星が通過している。東から西へ走るために走り続けるランナーたちは、百四日目の朝を迎えていた。彼らの後ろに点在した発汗の流跡が、ぬめぬめとした影となっている。その上を忍び寄る、金属片で指を切るような痛み――そして彼らは目撃した。これが彼らの今後を全て決めた。それは予言者の言葉に裏付けられている。「赤い雲から黒い雷が下ることだろう」。夜空では確かにオリオンと蠍座の赤い粘液に満ちた抱擁が行われていた。それは全く偶然の目撃であった。

勃発した発車五秒の自動車爆発、それが汚職政治家への目覚めの挨拶だった――と同時に次々と切られるカメラのシャッター音。それはいつまでも絶えぬ喝采となった。近隣のアパートやマンションからは、次々と欠伸が漏れ出て来るのが聞こえる。欠伸は数多のあぶくとなって弾け、中に詰まった夢が湧き出て来る……。その喧騒から数十分後、日常生活を送り始めていた彼らも、パトカーや消防車が駆け付けて来たことに異常を察知したようだった。

フライパンをもったまま出て来る主婦たちは目玉焼きを焦がし、ネクタイを結びかけたサラリーマンたちは首を括り、パジャマのままの子供たちはぬいぐるみを引きずっていた。みんな扉を蹴破って飛び出したり、枠が拉げるほどに窓を開いたりして、外の様子をうかがった――が、驚きは一瞬で、誰もが平生を過ごすような表情をして拍手した。至って冷静な会話――一つのテロリズムというものへの無関心な会話――が行われていた。

「やるならもっと派手にやらなくちゃ、とんだ茶番だ」

「そうね、面白味もないわ。物騒なくらいでちょうどいいのに」

「味気ない爆発だ、気の抜けたシャンパンのようだね、全く」

「いやあ、朝から面倒だ、こんなうんざりした眼醒めは滅多にないな」

「写真に撮っておかなければ、燃え立つ朝とはまさにこのようなことを言う」

「誰が死んだのだ？　私以外の誰かということしかわからない」

「季節外れの花火かと思ったけれど、こちらのが見栄えがいいわね」

「これが芸術と言われちゃ、仕方がないわね」

誰もが寝言のようにつぶやき、いびきのように喉奥を振るわせ、事件を淡々と見守っていた。彼らは本当に眠っているかのようだった。この爆発が誰の陰謀なのかは明白であった。住民たちへの夢告げが前々から犯人を伝えていた。背中が丸まって、腰骨の溶けてし

まったような陰気な男が、近頃うろついているのを誰もが目撃していもいた。その人物は草臥れて落伍仕掛けていたランナーであった。「こいつこそ犯人だ！」という叫び声。ごわごわのタオルのようになったランナーの死体を首に巻いた男が駆け回る。

そこに暗澹たる雨雲が刻々と迫ってくる――それでもランナーたちは傘一つ差さずに走っている――彼らが走るのを止めるのは、死ぬときだけである――。そして、雷が一瞬世界の像を銀幕の宇宙へ焼き付けた瞬間、続けざまに起きた、真犯人の男の練炭自殺、それは住人たちが夢で見た男とは全く似ても似つかない、筋骨隆々で、駅前などに張り出されていた指名手配犯の男であった。彼は公認された地下組織を統括し、たびたびテロ事件を起こし、ラジオで煽動的な声明文を流し続けていた。

こうして発生したもう一つの死はじりじりと燃え小さな炎によって引き起こされた、またもや車内でのできごとであった。自動車の扉や窓の隙間から漏れ出た一酸化炭素は、三途の川を渡るための六文銭に吸着して緑青の塊となし、もはやただの不渡り手形と化してしまった――だから男はもう三途の川を渡ることはできないかと思われた。汚濁した激流の三途の川を前にして、全裸でおずおず立ちすくむ元ゲリラの姿は誰もが思い浮かべた滑稽な図であった……特に秘書たちはほくそ笑み、当然の報いだと笑い転げた。しかし、この男は嘗て競泳の選手であったため、川幅十キロ程度ならばいともやすやすと泳ぎ渡ってしまったのだった。その光景を枯れ井戸の穴から見ていた政治家の秘書たちは、口惜しげな口調で、「あの男、首だけが泳ぎ着いていることに気が付きやしない。体は鰐に食い荒らされていると言うのに」と野次を飛ばして地団太を踏んでいた……。男の生首はその姿を反って嘲笑し、その残響が已むことないまま地獄の奥底へ転がっていった。

一方、そこに爆破された自動車を塗装していた白銀のペンキの蒸気の中から撒き散らされた鉄屑の種子が、ランナーたちや秘書たち、住民の体に寄生し始めた。鉄屑の種子は、彼らの血を吸い、肉を裂きながら鋼の蔓を伸ばし始めた……それは何千メートルも天へ向かって延び、金細工のような大輪の花を咲かせては、砂金の種を撒き散らし、七日間掛けて愈々富士山を越えて天蓋に到達した。斃れていく住民や秘書たちをよそに、それでもランナーたちは走り続け、西の果てへと蔓を伸ばせば、薄明が射している空へ沈みかけていた細月の鉤爪が「鳴り響け、鳴り響け」と蔓を掻き鳴らした。それは声もたない霊たちを目覚めさせる音色であった。ランナーたちは肉体が共鳴し、透き通るのを感じる。

その音は天蓋に幾重にも反響して大きく揺らすと、星々も位置をずらして、その調和に満ちた配置を崩した。そしてオリオンの死体が大地へ落下してきた。それは幾つもの巨大な隕石となって墜落し、摩天楼の際限なく続く地平は斑模様を描いて潰され、跳躍した大地は地層を断ち切り、大洋はポルカを踊り始めた。だがやがてポルカと呼べない程烈しい踊りとなり、大地を誘い込んだ輪舞となった。そして大海嘯によって立ち並ぶ家屋は漂流し始め、中に住んでいた人々は新天地を目指すこととなった。そこで急いで蝋燭と羅針盤を

抽斗から取り出して、リビングのテーブルへ並べたてた。羅針盤の無い家は、桶に磁石を埋め込んだ発泡スチロールを浮かべた。だが波は余りに強くうねり、せめぎ合い、家々は水平を保てなかった上、地上がどの方角にあるのかもわからなかったため、羅針盤は役立たずに終わった。だが更に悪いことは、蝋燭は顛倒して家々に火を放ったことだった。

「これでは家が燃え尽きてしまう」

「ならばこの大洪水のなかを、丸太一本で漂流するのみよ」

「ところがな、漂流したところで、それは火の海の中さ。ああ、燃えつきてしまう」

その豪火と巨浪は、森閑たる夜中に、眠りこけていた巨人たち、プロディナングの国をも襲った。巨人たちは、掌の大きさでも人間の身長以上にあり、首は細く、顔は漬物石のようで、鼻梁はテトラポッドのようだった。そこへ洪水が押しては寄せ、寄せては返し、やってくる。……。樹齢数千年の老木をなぎ倒し、ラフレシアよりも大きく香りの強い花々は根こそぎにされていった。やがてじわじわと押し寄せる水位が巨人の口や鼻をも覆い始め、愈々溺死する者が現れる。だが誰かの死が一万もの雷を落としたような咆哮を伴い、それによって誰かを目覚めさせ、目覚めた者はその驚きで心臓を破れさせて死に、その死がまた誰かを死の眼醒めへ誘うと言う連鎖が起き始めた。それいいことに黒い森から絶叫する烏が大挙して押し寄せたが、そこへ巨大な口を開いて待ち受けていた龍が、鰯を丸呑みする鯨のように平らげてしまった。

そうして古来鳥葬の伝統を保ち続けていた巨人たちは、火葬と水葬に同時に見舞われることとなり、生き残った――彼らが立ち上がれば、辛うじて顔は水面より出るため――親族たちは、ただ黙って、泣くことしかできなかった。そんな巨人たちの悲しみをよそにランナーたちはその流木を飛び跳ねて渡り、依然――いや、より速度をあげて――走り続けた。鉄の蔓はもう彼らの頭部ごと流れ去っていってしまっていたが、彼らは時折誰かの頭が流れているとそれを拾いあげ、自分のものとしてしまっていた。中には巨人の頸を着けてしまい、その重さに耐えられず溺れ死ぬランナーもいた。

やがて體半分焼け残ったまま山積みにされた巨人たちの尸の許に、人間の保健局から職員がやってきた。そして悲嘆にくれる親族に、百ページにもわたる書面を渡した。

「ここにある通り執行することは決まっている」

「こんなにも分厚い文書を読むことを、今の私たちに強いるのですか？」

「読む必要はない。これは決定事項であって、合意事項ではないからだ」

「ならば、わたしたちは自分たちの言葉を憎む、そしてお前たちの沈黙を憎む」

「巨人の声は馬鹿にでかい。耳が痛くて壊れてしまいそうだ」

その書面には衛生上、鳥葬を行うのは問題があるという事を理由に、強制的に火葬を執行すると書かれていた。何も知らない巨人族は鳥葬のため、洪水で荒地となった野に死体を並べ、烏を呼ぶため

の標を立て始めた。そのためには保健局は、弔いのために一万三千人の僧侶を全国からかき集めた。だが巨人族の親族たちは、ますます増す落胆し、長い溜息を一つついた。その強風に煽られた巨炎はあっという間に彼ら僧侶を丸焦げにしてしまった。これは一切が天災から招かれた偶然の悲劇であった。

しかしそれは、新聞社が一面に取り上げたことで一切の意味が変わってしまった。生き残りの住人たちに届けられた朝刊には「僧侶一万三千人、抗議の焼身自殺。仏教界からも怒りの声が」と出ている。記事の中では、この焼死事故は英雄視され、政治家たちは糾弾された。その光景を収めた写真は、大量のポスターとなって印刷され、町中の意壁に張りだされた。ランナーたちの走り抜ける街路に吹き散らされた地下出版された記事はこう総括する。「なんせすべては、一人の政治家の汚職事件と、その暗殺計画が発端だったのである。」住民たちの憤懣は、記事に煽動されたうえ、徴税人への差別意識と相まって、抗議活動へと発展したのだった。

その時に動いた巨額の金銭は、実際のところ企業団体が自社の社員たちから吸い上げた脂肪の塊――社員たちは長年のオフィスワークで、医師にメタボリック・シンドロームと診断されていた――を、肉饅頭にして売り出した利益によって得られたものだった。少し時間を遡ると、この肉饅頭はパリスナンヤという薬品名めいた名前で売り出され、コンビニ店頭でも並んだが、倫理的問題を市民団体に問われたためすぐに販売中止になった。とはいえ、そもそもその味の臭みから一般に食されることはなく膨大な在庫が企業団体の経営を苦しめていた。そんな中、絶え間なく印刷された政治家たちの協定文書で、貧困国へ安価で輸出されることが決まった。それよる利潤が今回発覚した賄賂であった。

ところが政治家の一人B氏は、ある時抑えられない欲動に突き動かされ、この不味いと評判のパリスナンヤを夜中に一人隠れて冷蔵庫の前で貪り食ってしまった。その勢いたるやすさまじく、満腹になっても食欲が抑えられない――その酷い味にもかかわらず――で食べ続け、吐き気を催し、それでも食べ続けたため、吐瀉物が気管へ逆流して取れこんでしまった。冷たい姿で発見されたのは一週間後の正午のことだった。その顔は空腹に苦しんでいるようだったが、原形を保ち大理石像のように白くなっていた。

そしてその政治家の葬列式でのこと。歩みを止めないランナーたちも薔薇の花を手向けて過ぎさろうとしたが、丁度その時棺桶の中から「今は何時だ？」と声がした。と同時に、釘打ちされた蓋をどんどん叩く音がする。驚いた教父や親族は慌てて棺桶を叩き割った。瞬間、政次官は「眩しい！」と叫んで跳ね起きた。このことは翌朝の新聞でも報道され、一部では「タブーを犯した奇跡だ」とか「票集めのペテンだ」と騒がれたが、ひと月もすれば科学雑誌にパリスナンヤの不死効果についての論文が掲載された。とはいえ、この論文も発表されるや否や注目の的となる一方で、この科学史的に脈絡ない発見には大きな懐疑が寄せられた。不死というものがそもそもあり得るのか、死生観を巡って生物学者から宗教学者、引いてはテレビの前の主婦までもが考えるようになった。だが復活したB氏は

取材を受けていった。「この世には二種類の人間がいる。理解してもらえない人間と、理解させる人間だ」そんなスローガンを掲げ、彼らは自分たちの「理解」を真理と決め込んでいた。B氏は自分がよみがえったのはパリスナンヤを食べたことが原因だったと信じて疑わなかった。

　そのB氏の一言の影響は大きかった。冷凍庫の中で眠っていた大量在庫のパリスナンヤは注文が殺到し、巨大貨物船に積もうと並べられていたコンテナは再びトラックに乗せられ全国を流通した。

「生命保険会社が倒産したよ。他にもその影響で経済は壊滅状態かな」

「経済のことなんて考えるなんて偉いことだね。死生観の一つも片付かないのに」

「両方とも今に消え去る議論だよ。そんなことで頭を使うのは、愚人か貧民のすることだ」

「いいじゃないか、どうせ生きていられんだ。何もしないには十分な時間が、何かするのは長すぎる時間があるんだ」

　こうしてアメリカや日本、ユーロ圏の国がパリスナンヤを一斉に買い占め始めた。輸出制限もなされ、貧困国はまたもやもとの貧困へ陥ってしまった。不死の評判が高まったパリスナンヤは美食家の間でも評判となり、珍味としてもてはやされた。そうした不死となった人びとは、自らをパリスナンヤ族と名乗り、国連から勧告が入ったことをきっかけに連合を組み始めた。共同戦線を組むための協議も空虚執り行われ、核ミサイルのボタンが押されかもしれないと危ぶまれた。どうせ核のあとに残るのはパリスナンヤ族だけだった。

　不死である彼らは最早怖いものなどなく、一切を無視と決め込んでいた。そんな厚顔な様を曝しているうち、不死の効果とは裏腹に、パリスナンヤは老化を急激に早めることが発覚した。それは研究などという過程を経なくとも、先ほどまで傲慢に不死を誇っていた彼ら自身を見れば一目でわかることだった。パリスナンヤ族は数日に間にすっかり老いさばらえて、硬くなった角質の塊が這いまわるように移動するのが特徴となった。その脇をランナーたちは颯爽と駆け抜けた。ところが巨大なゾウムシのような彼らは誤った情報に騙されたと一転して苦情を寄せ始め、自国の産業を破壊しにかかった。彼らはのろのろとした動きしかできなかったが、その動きを抑える軍隊ものろのろ動いていたため、その争いは一時間経っても、血一滴流れることなかった。そこに絶好の契機と思った貧困国が、抗議活動を越境させ始めた。

　そしてパリスナンヤ族たちの議会堂へ大量の火炎瓶が投げ込まれた。そして天が朱色に染まるほど燦々と燃え輝いた時、核でさえ生き残ると信じて疑わなかったパリスナンヤ族の肉体は瞬く間に蒸発して、陰影は残像となってコンクリートの壁面に残され、そのコンクリートは溶岩のようにどろどろ溶けてしまったので、ありとあらゆる影だけの存在は大地に沈み込んでしまった。抗議スローガンであった「人類は生命を取り返せ」という言葉も人間と一緒に溶けてしまった。燃え盛る焔は核の冬よりもあらゆるものを消し去ってしまった。

もはや誰もいなくなった荒地が広がるばかりだった。そこに干潟一つから掘り起こされた全ての貝が用いられた螺鈿細工の過剰装飾で批判を浴びながらも、かつて栄華を誇った宮殿を再利用した議会堂は、廃墟となっても崩れたりせず、堂々と建ったままであった。そしてその宮殿の庭園を閉ざしている、鮮やかで貪婪に光を咥える茨の巻きついた鉄門には言葉が刻まれている。

「あなたは、わたしであって、彼であり、あれであり、それである」

流麗な書体で刻まれたこの言葉は、時代錯誤な豪勢さを誇る庭園への製作者の密やかな反抗であった。この庭園のあるじはまさに、誰でもあり、突き詰めていえば庭園自身だったのだ。この支配の塊は水彩的に鮮やかな花々に満ちている。馥郁な風吹く中、一連の事件を目撃してきたランナーたちは依然走り続けていた。彼らはどうしてもこの門を通らなければならなかった――そして足踏みをする……。ランナーたちは最早居なくなったあるじでもなければ、誰かも解らぬ彼でもなかった。困惑していたランナーたちの許へ、続けざまに骨張った年寄りの門衛が槍を突きつけ問い質す、

「お前は私でなかったら誰なのか」

しかしランナーたちには答えは必要なかった。その門衛は苔が生え喜びの醜さに吐き気を催す、美形の顔をした天使だった。ただ彼が美形の天使であるには歳を取り過ぎており、醜悪な悪魔になるにはまだまだ若すぎたのだった。彼は遊ぶことすら知らないまま歳をとってしまい、一つたりとも賢くなることもないまま詐欺師を続けていたため、恥じ入って乾いた黄砂となって消え去った。

その黄砂を、何の遠慮もなく足跡を残して西に向かって通り過ぎていくランナーたちはまたも目撃することになった。というのも、これらの事件に関する際限ない捜査を続け、更には厖大な書類を描き上げなければならないことに嫌気がさした警官たちが、警察署から逃亡した後ネットカフェで服毒自殺を図ったのだった。ランナーたちはその警官がパトカーで逃走しているのを追尾するように走ったが、パトカーは途中のネットカフェに一斉に止まったのだった。彼らは個室の中に籠ると、最後の一服をふかし、腰に差した銃を用いるわけでもなく毒をビールに溶かして呷ったのだった。だが、自殺した彼らは自分たちの四肢を手持ちのナイフで切断し、その断面図から新たな牧場の設計図を描きだした。それは血染めの設計図であった。その遺言のような設計図は、密閉パックに収められた状態で警察署に沢山届けられた同情の感涙によって滲んでしまったものの、なんとか実現させようと言う喧伝活動が行われるようになった。

「設計図の公開を至急要請する」

「警官の命は無駄ではなかったことを明かして見せる」

「警官は命を失った後に四肢を喪わざるを得なかった。その苦しみに思いを」

活動は激化し、ゲリラ活動で警官隊と衝突することさえあったが、それでも何千万もの署名が提出されたために、国は応えざるを得なくなり、全国のゴルフ場やスキー場に閉鎖するよう通告がなされた。

牧場の造営が実施される日にいたって、ブルドーザーは問答無用に丁寧に整えられた芝生や人工雪を潰してしまった。ランナーたちはブルドーザーより速く走ったので命からがら逃げおおせたのだが、何も知らずに遊興していた人びとや野生動物を轢き殺し、掻き集めた人頭や猪の頭、狐の同体、そしてそこに混在していたドングリの実を、トラックに積んでもちだしてしまった。そのためドングリの実を喪い、冬籠りの栗鼠が餓死していく中、その死骸に集った狐たちのゾンビ――狐たちは自身の神通力で何とか蘇ることには成功したのだ。それは蓬の葉一枚あれば事足りる簡単な霊術だった――の毛から振り落とされた蛆虫が、栗鼠の死肉を喰らい尽くし、賦課するなり大量の銀蠅が湧き出した。

その塊たるや一つの街を影に収めるほどの大きさであった。肉体の大きさを誇っていた入道雲も、自らの小ささに恥じいり、思い立ったように雨となって消えてしまうほどである。そしてその巨大な蠅の球体は互いの摩擦で高熱を生みだし、自らの身を焼き焦がしながら発光し始めたため、ベテルギウスよりも明るい巨星となって霊峰の剱先に鎮座した。突如示現した原始の神と思われたその球体は、山猿たちが崇めたてまつり、ボス猿は司祭の如く振る舞いをして、真実の姿を一目見ようと直視したために失明した。だが同時に体験したことないような鳥肌が立ち、そのまま禿げあがった赤裸が巨大なイボだらけになってしまった。そして見えなくなった眼の奥で見つけ出した脳内を浮遊する気球団に、歯茎を剥き出しにして怒りを露わにした。これこそ神のお告げであると猿たちは一斉に歯茎をむき出しにして、喚き始めた。

すると山麓は瞬く間に肉色に染まった――それは満開の桜が埋め尽くすが如き光景であった。生き延びた住民の多くは、黒い森が肉色の花で満ちたことに目を疑った。だがランナーたちは見惚れて立ち止まることはしない。一瞥ですべてを見て取ったのだった。通過中衛星カメラはその彼らの様子を中継し、何もかも失って退屈し切っていた人びとは、テレビの前に座り、その姿に感涙をこぼしていた。だが百六日目を迎えた早朝のランナーはこれらの騒動を、夜が明け切る前に全て目撃したのだった。彼らの中で流れる時間は、彼らの走る早さに従って多少のずれがあるようだった。そして冬風に鳥肌を立て、白い息が一瞬で凍りつくと、氷雫となって幾重にも重なり、彼らの足跡に突き立てられる氷柱になっていく様に気を取られつつも、寝ぼけ眼から垂れる涙に全て忘れてしまった。

（了）

黒牛の絵画

安部孝作

そしてすべての照明が落とされる。誰もいなくなった部屋には一枚の絵画が残されている。端のない長い樫の木のテーブル、それを覆う純白のテーブルクロスは薄闇の中で生々しく、空気の揺らぎによっては白い芋虫がうねるようだった。そこに並べられた銀食器は老年の給仕によって細やかに磨かれ、煤の掃われた燭台には三本の翠色の蝋燭が刺さっている。今、中東風の顔立の壮年の給仕が一つ一つに火を灯して廻っている。鬼灯のように火が膨らむと、透明な蝋が融けて流れ出し、淡い褐色の光がテーブル状を照らす。瞬間に、これまで誰も座っていなかった高背椅子に、獨逸から招かれた来賓が立ち現れた。ネクタイピンや金釦、鎖骨に垂れる真珠のネックレスが端正しくある。暗くて表情までは見えないが、辺りは話声一つ——息遣い一つ——聞こえず、胴体は不動を保ったままであった。等間隔に並べられた燭台の傍らには、蒼白い大きな花弁を広げたオペラ咲きのマーガレットが活けられ、ぬるい空気に仄かに香る甘みをとけこませ、いまだ来ぬ蜂や黄金虫を待つ寂しさに身を震わせている。この長大な部屋の空気をかき混ぜため幾つもの扇風機が天上からぶら下がっている。その扇風機が全て同時に、また一巡した、その時この端のない直線的な大広間の中心点に設えられた古時計が、大鐘を揺らして来るべき時の音を響かせた。音は泡となり、扇風機の羽根の端に絡みつくなり弾けて消える。大理石が組み上げられた部屋の四方の壁に彫り込まれた、豹を模したような彫刻の舌先にぶら下げられた幾つものガス灯が一斉にともった。光度が徐々に上がるにつれて、時が再度流れ出したように宴が始まった。どの人もその淀みない所作で、その余りに完璧な動きに思わず人の皮膚を被った機械が動いているのではないかという印象を与える。そういった人々の中、ただひとり相変わらずじっと浮かないまま、銀皿にのった合鴨のローストに釘づけになっている、垢抜けない少女がいた。極東の国日本の九州に炭田を幾つも所有するという豪商の娘であったキョウコは、この宴に来るのには前々からかなり躊躇していたのだが、頑固で横暴な父の、今にも筋張る拳骨を見るだけで、招待に応じることに首肯したのであった。彼は招待主の獨逸人の名前を読むこともできないほどであったため、ここに来る資格はないと思っていた。辺りでとびかう異国の言葉と哄笑、カチカチとなる食器やグラスの音が聞こえてきても、最早キョウコには街中の雑踏と同じようなものであった。しかしキョウコは空腹であった。せめて眼の前に出される食事だけは遺さずに平らげてしまおうと思った。

だが、彼女の食欲も湧きあがったところで、正面に飾られた、金縁にはめられた黒い牛の絵画のせいで、たちどころに失せてしまう。その絵の黒牛の傍らに居るのは貧しい農夫で、その角に縄を結いて強引に連れて行こうとしているが、舌を突き出し、充血した白眼はぬめり、巨大な穴のような瞳を爛々とさせた黒牛はびくともしない。牛のわき腹にはアルファベートのIとアラビア数字の2-1焼き印がある。牛はこの農夫のものなのか、それとも今にこの農夫が盗もうとしているのだろうか。足元の草は枯れ、放埒に巻いた蔓が不気味な蓬色の植物、背景のくすんだ空色の雲、農夫の頭に乗った、撚れて黄色も褪せた襤褸襤褸のハンチング、それに抑えつけられただけのぼさぼさで脂っけの多い不潔な髪、剃られない鬚、太い指先の荒々しく溝の入った大きく分厚い爪、目元の皺に溜まった眼脂、踏ん張る足元に盛り上がった土が、赤黒い血を沁み込ませていること、それらすべてが物語るものが何か、キョウコは思いを巡らせたが、判然としなかったため、「どうして食堂にこんな絵を飾るのかしら」と不機嫌に思っただけだった。だがキョウコは気付かなかった、雲が覆い隠して暗くなった昼、眼鏡も持てない目の悪い農夫が力づくで引っ張っているその牛は、既に死んでいることに……。今までとまっていた分を取り返すかのように時を刻む時計は異様な速さで廻っていた。次第にその動きも緩やかになり、宴の雰囲気も発条が伸びきったようだった。顔の見えない人影も、扉の向こうも、隣の部屋も、天上の上も、床の下も、失せていく気がした。金の房がついた緋色のカーテンは重く閉ざされている。キョウコは外界から遮断されている感覚を覚えた。風、動物、鳥、何もいないのかな、そう思った時、突然精巧なガラス細工でできたシャンデリアが灯りをともしてこの大部屋を照らし出した。煌めくガラス、反射する銀食器の数々、照りかえす果物の皮、喜んだ表情を映し出す鏡、絹のテーブルクロスは銀雪のようで、目が痛むほどに眩しく、皮膚は焼け焦げそうだった。

第二の宴が始まったのだ。着飾った紳士淑女に、令嬢が再度談笑に華を咲かせ、蝋燭はもう控えめに、それでいて恥ずかしそうに震え、急激に融け切った。マーガレットは花弁を落としテーブルクロスを黄色い花粉で汚した。銀皿の料理も殆ど平らげられ、ワインも何本も空けられていた。顔を真っ赤にして唇の色を青黒くした男たちが濃緑のボトルとともに床に転がっている。紫煙が濃く充満し、燻された獨逸の令嬢の金髪は少し艶を失った。毛のない猿のような、卑猥な笑い声が次第にあがると、耳を押さえた少年少女は眠たげに瞼を下ろし、眉毛をくすぐったく感じている。キョウコも少し疲れを感じていた。

そこへ漆黒のヴェールを被った一人の若い女が給仕に耳元で囁いた。俄かに照明は落とされ音楽が奏でられた。聞いたこともない東方のぼやけた音像。夜明けの海辺を思わせる。潮風はまだ弱々しい。寝覚めの火照った頬を涼しく撫でる。瞼の裏には太母の微笑みを映す。水平線上では早起きの漁師たちが網を投げかけている。異国の旅人を乗せた巨大な客船が、厳かに波を切っている。雲が海に融けてゆく。砂浜は本物の星屑で埋まった。キョウコは星の尖った

破片を拾って、髪を飾り、ヴェールを裂いて、アーモンド色をした美しい肌を曝して踊り始めた。給仕が銀皿にのせた色とりどりのマカロンを踊るキョウコの許へ運ぶ。空腹はないけれど、手が伸びる。甘くほんのりクリームが香るマカロン、歯触りが良く、口腔内で溶けてしまう生地は、指で少し強く押すと崩れて痕が付く。誘われるように、でも迷いなく、齧ってみた。不思議にも甘みはなくて、肉の味が微かにすると、あとは唾液の味がした。マカロンは、赤、萌黄、菫、桃、黄、孔雀石、と色取り取りで、その中の一つに、ラピスラズリのように、星を散りばめた群青色の天盤を模したものがあった。それは明らかに忠実な鉱物を再現していたが、質感は柔らかな宇宙の球体にそっくりだった。食べてみようか、止しておこうか。キョウコはその真理のように美しいマカロンを齧るのが惜しく思った。しかし迷っていると、羽団扇で深紅に塗った唇を隠した貴婦人が、近寄ってきて、欲望で濁った眼を細めているではないか。キョウコはさっと手に取り、躊躇いなく一口齧った、が――その時、建物が大きく揺れ、カーテンの裏から拉げた枠が飛び出すと、ガラスの破片が銃弾のように飛び散った。灯りは消えて、どんよりとした暗闇が辺りを包む。来賓はみな狂乱し、椅子を蹴り倒し、テーブルをひっくり返した。木が圧し折れる音や、板が踏み破られる音、銀皿が裂ける柔らかで鋭い音が混然一体の音の塊となった。あまりの騒がしさに耳は痛む。喧々諤々として退去し、やがて人の声は一切しなくなった。闇はすうっと薄くなり、まだ一つ灯る蝋燭の近くで、キョウコはまだ奇妙な踊りを続けていた。だが、音が一切しなくなると、彼女は壊れかけの椅子に座った。乱雑に散らばったあらゆる残骸に囲まれて眠ろうと瞼を閉じた。そして鼻と口を開いた。潮風を胸一杯に吸い込んだ。一面に広がる星屑の浜は燃え尽きて、灰の中から蟲が動き始めた。月と太陽は巡り巡って、何度も満月を迎え、何度も新月を迎えた。今は夜だろうか、昼だろうか、漸く眠気が強まって、植物が騒がしく唸り始めたころ、雨が降り始めた。キョウコは唇に着いた雨水を舌で舐めとった。とても甘い水滴を、乾ききった干物のような舌に何度も転がした。キョウコはもう目を開かなければならないかもしれないと思って天を仰いだ。すると天は随分高く昇っていた。星が歩むたび金属音を響かせていた。まだ眠ろうとしてもいいのだろうかと、少し安心した。とはいえ簡単に寝つけない。キョウコは苛立って立ち上がろうとした。ところが身体は動かなかった。蟻が脚の上を這っているのがわかるけれど、頭さえ動かない。翌朝、太陽が南中し、蝉がけたたましく喚き立て、牛がげっぷを三回した頃キョウコは眼を醒ました。そして目の前に一度会ったことのあるような異国の男が、青い目を虫めがねに拡大して見つめているのに気が付いた。聞き覚えある言葉を二三呟いて、大きなカメラを構えた。強烈なフラッシュが焚かれる。そしてリュックサックからスコップを取り出すと、キョウコの足を傷つける。痛い、痛い、と咽び泣いて、涙を流したら、細い種子がほろりと地面に落ちた。男は種を拾い上げて、虫めがねで丹念に観察すると、胸ポケットに入れた。鬚を撫で、喉を鳴らした。足許に、キョウコの赤い液体が広がり、黒く肥えた土は、どくとくと血管が脈打つよ

うに、吸い込む。土饅頭は膨らんでゆき、とうとう牛の形となった。男は牛の角に縄を結って、引っ張った。銅像か、あるいは地面から生えた岩石のように重くて動かない。踏ん張ると足許の地面は押し込まれたマカロンの生地のように凹んだ。綱引きは幾昼夜已むことなく、キョウコの身体は動くことを忘れ、綱引きもそのまま凍りついたかのように動かなくなった。

そしてすべての照明が落とされる。誰もいなくなった部屋には一枚の絵画が残された。

（了）